



バーミンガム・ロイヤル・バレエ『美女と野獣』(ピントリー振付)より、ベル役の佐久間奈緒と野獣役のイアン・マッケイ Photo: Dance Europe

## 11月号の主な記事:バーミンガム『美女と野獣』

バーミンガム・ロイヤル・バレエが、『美女と野獣』を再演しました。今月号の日本語ページでは、マギー・フォイヤーによるその舞台評をお伝えします。

デイヴィッド・ピントリーの『美女と野獣』は、主として美女の描写に力を注いだ作品である。視覚的には驚くべきものがあり、フリップ・プラウズによる美術には、夢や月に照らされた庭園に落ちるベルベットのような影、細やかな装飾のほどこされたバロック式の広間を満たす柔らかな金色の光などが詰まっている。しかもそれらは私たちの目の前でみるみる転換し、あたかも巨大な“飛びだす絵本”に描かれたおとぎ話を見ているような気分させる。そして物語は、二人の美しい男女が恋に落ちるといふありふれたものではなく、内面の美しさが勝利を収め、心やさしき野獣が人間たちよりも穏やかな存在に見えるというもの。この美術と物語の素晴らしさに釣り合う振付と音楽を作り出すのは、並大抵のことではない。今回の再演も、構成はきちんと出来上がっているものの、美術と物語にマッチするレベルにまでは至っていない。

パド・ドゥは、いずれも魅力的だった。タイトル・ロールの二人に加え、今回は野獣とワイルド・ガール(アンブラ・ヴァッロ)の謎めいた関係も、明確に定義されていたように思う。その一方でコール・ド・バレエの場面のほとんどは、クラスルーム・アンシエヌマン症候群とも呼ぶべき状態に陥っていた。ピントリーの振付は、エキセントリックな人物を造形するときにもっとも大きな効果を挙

げる。この作品でも、マイムと古典バレエのステップによって、手を変え品を変え、コメディとドラマにあふれた商人の世界を描き出していた。

グレン・ビュアーの音楽は、映画音楽的な手法、骨太な筆致でよく雰囲気を出していたのだが、振付の創造性を呼び覚ます力となるリズムの多彩さという点では、特筆すべきところはなかった。

佐久間奈緒は、やや自己充足的なところはあったものの、正真正銘の美女である。怯えと好奇心の入り混じった感情をもっと出せれば、より魅力的だったに違いない。イアン・マッケイは、悪ぶった青年が悔悛の日々を経て善良な人となる王子の心の旅を、説得力たっぷりに表現していた。そして二人の最後のデュエットは、このバレエの幕切れとしてじつにふさわしいものだった。

バーミンガム・ロイヤル・バレエにはすぐれたキャラクター・ダンサーが多く、情の濃やかな商人役のマイケル・オヘアは、いくつかの場面で父親の威厳もたっぷりに、わがままで勝手な二人の姉妹(ヴィクトリア・マールとサマラ・ダウンズ)を扱った。ジョナサン・ペインは、ころころした豚のようなムッシュ・コシオンをどこをとっても可笑しく演じ、マリオン・テイトは居丈高な祖母を、ほとんど地のように遠慮会釈なしに演じた。

いくつかの不満が残るとはいえ、『美女と野獣』は観客のお気に入りであり、大好評のうちに幕を閉じたのだった。

(訳:長野由紀)